

C-81 和服の着付に関する人間工学的研究(第4報)肩傾斜度の着くずれに及ぼす影響
大阪薫英女短大 三浦美子

目的 衣服は肩で着ると言われるように、着装上の美的効果、運動機能は、着衣基体としての肩部に支配される場合が多い。和服は、肩縫目線のない直角をなす衣服であり、しかも開放的であるため、複雑な肩関節運動は、和服との間に生ずる抵抗量が比較的少ないが、今回は肩傾斜度による和服の着くずれへの影響について日常的な歩行実験を行ない、各部の着くずれ寸法を計測、およびその状態を写真撮影して、その結果を人間工学的に比較研究した。

方法 肩傾斜度は、KYS新型人体角度計を用いて、なで肩傾向、いかり肩傾向の被験者各2名を選び、大裁あわせ長着(表布、裾廻し布は一越ちりめんの風合をもつシノン、胸裏地は絹100%)肌じゅばん(綿100%)を実験衣とした。約30mの距離を歩幅60cm、112/分で歩きつゝ、途中ステップワークは凸型20cm、40cm高、並びに158cm(近郊私鉄吊り高)に設定した水平棒を左右交互に把握させて1周することを1サイクルとして10回繰返した後、頸高点を基点として水平に、およびえり打合せ点までの垂直線、えり先点、指先点の4部位についてずれ率を計算した。

結果 和服の着くずれに関し、その要因と考えられる点について、既に試みた2,3の実験結果に基づいて、今回は肩傾斜度との関係について歩行実験を行なった。各項目間においては統計的に有意差は認められなかった。また、なで肩は、いかり肩より頸部から胸もと周辺におけるずれが大きく、肩傾斜度は着くずれの一要因となることが判明した。